

ルジャン・レンテン

バリ島でいま一番アツい奉納舞踊

近年バリの中年女性たちが熱中しているのが奉納舞踊ルジャン・レンテン。

この舞踊は、宗教儀礼の枠を超えて様々なシーンで楽しめるがゆえ、舞踊の神聖さとは何かという問いを巻き起こす。

吉田ゆか子 よしだ ゆかこ / AA 研

Facebookで見つけました

インドネシアのバリ島の芸能を研究している筆者が見つけた「はやりもの」は、婦人たちによる奉納舞踊ルジャン・レンテンである。ルジャンとは、儀礼で神々に捧げられる神聖な群舞の一ジャンルであり、この踊りはそのルジャンの一種ということになる。筆者が大流行に気づいたのはSNS上であった。いまやフィールドワークもSNSと切り離せない。バリの友人たちにはFacebookのユーザーが多く、彼らの投稿を通して、筆者は日本にいる間も現地の芸能の動向をウォッチしている。そんななか2017年くらいから、このルジャン・レンテンを儀礼で踊る女性たちのビデオを毎日のように目にするようになった。お揃いの白いブラウスに黄色の巻きスカートを着て、かなり念入りな化粧とヘア・メイクをして、楽しそうに踊る女性たちの姿が目をついた。伴奏曲で何度も繰り返されるキャッチーなメロディーもすっかり覚えてしまった。

一般的な「伝統芸能」のイメージとは裏腹に、

バリ舞踊には流行があり、新作も次々と生まれている。これまでも色々な演目が流行し、その後あるものは廃れ、あるものは定着していった。それまで廃れていた演目が何かのきっかけでリバイバルするケースもある。ルジャン・レンテンもそうしたバリ芸能のダイナミクスのなかにあるといえるが、その流行のスピードと盛り上がりは突出している。2018年に調査に行ってみると、実際色々な寺で奉納されていた。ある寺では、ルジャン・レンテンの伴奏曲が流れ始めると、ワーという歓声があがり、前方で観ていた女性たちまでが体を揺すり、いまにも踊りだしそうな勢いであった。そして踊り手たちの晴れ晴れした姿と、取り巻くスマホのカメラの数々。調査地で目にしたルジャン・レンテンには、新鮮で明るいオーラがあった(写真1)。なお、この踊りの練習に張り切る奥様連中の様子や、家に置いてけぼりにされて寂しい旦那の様子がジョークのネタになったりもしていた。男は外で社交をし、女は家事と子育てに責任を持つといった伝統的なジェンダー役割分担をわ



ずかながら揺るがしているようにもみえた。

流行の背景——中年女性の楽しみとしてのルジャン・レンテン

このルジャン・レンテン、テンポがゆっくりなうえ、動きはシンプルで繰り返しが多い。そのためどんな人でも見様見真似で踊ることができる手軽さがある。また、それに熱中しているのが、中年女性たちであるという点も特徴的である。バリの女性は、若い頃によく踊っていても、結婚した頃から舞台上がらなくなるケースが多い。しかし、ルジャン・レンテンでは、若さや機敏さや力強さよりも、老いの美しさがにじみ出るような表現や、ゆったりとした身のこなしこそが相応しいとされるうえ、衣装はフォーマルで露出が少ない。また奉納舞踊のため、そこに参加しても、家を放り出して趣味に興じているといった非難を受けにくい。普段、着飾って踊りを披露することの少ない婦人たちにとり、この舞踊は貴重な機会となっているようだ。



写真1 ジャカルタ郊外のヒンドゥ寺院でルジャン・レンテンが踊られている様子(2018年2月15日、チネレにて筆者撮影)。

写真2 正しい踊り方を普及させるために作られ、YouTube上にアップされたビデオ。中央左側のグレーのブラウスがダユ。下のQRコードまたはURLから、動画をご覧ください。



<https://youtu.be/fpsYFXB9KQ0>
(2019年10月30日アクセス)



また、この踊りが、行政のプロジェクトの産物であるという点も流行に大きく寄与したであろう。バリ島のすぐわきのペニダ島に細々と伝承されていたレンテンという素朴な奉納舞踊があり、バリ州の文化局は1999年にその復興にのりだす。レンテンを調査し、他の舞踊の振りも取り入れながらこれを新たに整えると、ルジャン・レンテンと名付けた。2011年に日本人グループが芸術祭で上演したこともあり、次第に知られていったのだが、この官製ルジャン・レンテンを広めた中心的人物に、ダユことイダ・アユ・ディアスティニさんがいる。優れた踊り手で、文化局の職員でもあるダユは、バリ中の村々、およびバリ島外のバリ人コミュニティを訪れ、この舞踊の解説をし、また踊りのワークショップを開いている。ダユはこうした各活動に、レンテンの発祥地ともいえるペニダ島のダレム・パッド寺院から頂いた聖水を持参していた。彼女はこの寺院の神格の力添えを祈りながら、ルジャン・レンテンを教えたり踊ったりしているという。美しいダユにはファンも多く、筆者は彼女のカリスマ性もこの流行を幾分か後押ししたのではないかと考えている。

競技会と自治体行事

宗教儀礼以外にこのルジャン・レンテンを目にする機会として、競技会と自治体の記念日の行事がある。競技会の場合、村が主催し、村内の各集落から15~20人程度のグループを出して競わせるといった形式が多い。筆者が訪れた村では、競技会に19チームが参加していた(写真3)。神聖な舞踊だということで、勝手なアレンジや創作は良しとされず、必然的にどのチームもほとんど差のない似通った演技となる。ただでさえ繰り返しの多いこの踊りを延々と19回鑑賞するはめになり最後には朦朧としたが、それぞれの家族たちが入れ代わり立ち代わり見に来て大いに盛り上がっていた(実際には、ルジャン・レンテンはレンテンを元にしたある種の創作であるといえる。よって、それをさらにアレンジしたって良いじゃないかと突っ込みたくもなるのだが、理念上は、神聖な舞踊には「あるべき姿」があり、余計な改変はその価値を損なうとされる)。最後には審査員の講評が行われる。競技会もまた人々がこの舞踊を学び、さらなる活動を動機づけられる機会となる。

県などの自治体の記念日にこの踊りを用いることも流行った。そこでは、時に数千人といった規模の大量の踊り手が動員される。2019年3月にはブレレン県シンガラジャにおいて、7289人によるルジャン・レンテンが踊られマスコミを騒がせた。大通りに延々と、そして整然と連なる女性たちの舞姿がドローンで撮影され届けられた(写真4)。その視覚イメージは確かに、県の統制力や、県民の団結力を誇示し、祝ううえでの有効なツールであろう。そして下世話な私は、この流行



写真3 競技会の様子。手前の女性は審査員(2018年8月12日、バリ島パドゥン県にて筆者撮影)。

写真4 ネット上で報道されたシンガラジャでの様子(Dewata Pos 2019年3月30日)。出典<https://dewatapos.com/7-289-penari-rejang-renteng-warnai-415-kota-singaraja/>(2019年10月30日アクセス)



写真5 ルジャン・レンテンの大流行に続き、たくさん新作ルジャンが創られた。このルジャン・サリはその一つで、写真はジャカルタおよびその郊外のヒンドゥ教徒たちによる上演(2019年9月14日、ボゴールにて筆者撮影)。

によって生地屋や仕立て屋、そして美容院や化粧師もずいぶん儲かっただろう、などと思わずにはいられなかった。

舞踊の神聖さとは

こうして儀礼の外でも頻りに踊られていたルジャン・レンテンであるが、近年その神聖性を巡って議論がなされている。ある人は、この神聖な踊りは儀礼でのみ踊られるべきで、競技会の種目にしたり、県政の道具にしたりしてはならないと訴える。また別の人たちは、ルジャン・レンテンが、頻りに世俗の行事で踊られていること、奉納舞踊にしては技巧的でエンターテインメント性が高いこと、一時期のブームに過ぎない可能性があることなどを理由に、より古い他のルジャンと同等の神聖性を持たないと感じている。文化局は前者の立場で、最近正式に儀礼の外での上演を禁止する通達を出し、また衣装、踊り手の資格(既婚女性であること、月経中など穢れの状況にない

ことなど)、踊りのうち省略してよい部分とそうでない部分などを厳密に規定することで、よりこの舞踊の神聖さを強調しようと努力している。ちなみに、ダユはかつて私にこの舞踊を教えてください、奉納にも誘ってくれたが、この新しい文化局の規定によれば、未婚者である私は踊る資格がないことになる。もう一緒に奉納することはできないのだろうか。しかし依然として、この踊りは奉納芸というより余興の一種であると考える者たちもいる。筆者のもう一つの調査地、ジャカルタのバリ人コミュニティでは、むしろ儀礼の重要なプロセスが終わったあと、付け足しのような形で踊られている。この官製ルジャン・レンテンは、舞踊の神聖さとは何か、何が奉納に相応しい踊りの条件なのかについて議論を巻き起こしながら、いままも社会のなかでの位置づけを探している。FP